

九大とタッグ 独自素材を活用

次世代有機EL 実用化へ新拠点

福岡市西区

次世代ディスプレイ素材として、スマートフォン（多機能携帯電話）や薄型テレビなどに利用される「有機EL（エレクトロルミネッセンス）」の研究施設「有機光エレクトロニクス実用化開発センター」（愛称、アイ・キューブ・オペラ³i-o-pera）が19日、福岡市西区の九州大学伊都キャンパス近くに開所した。同大が研究する安価で発光効率が高い新素材を生かし、産学官が連携して製品化を目指す。



有機ELの実用化への研究拠点となる「有機光エレクトロニクス実用化開発センター」

有機ELは、有機化合物の薄い膜に電流を流して光らせる仕組み。現在主流となっている「第2世代」は、高価なレアメタル（希少金属）のイリジウムなどが必要で、高コストが課題になっていた。九大の安達千波矢教授の研究チームは昨年12月、希少金属を使わず、コストを約10分の1に抑えられる新素材の開発に成功。同センターでは、この新素材を活用した「第3世代」の有機ELの実用化を目指す。

作室などを備える。

同センターの総事業費は約9億円で、国や県などが補助金を拠出。福岡市が約3600平方メートルの敷地を無償貸与した。施設は、鉄筋コンクリート造りの2階建て、延べ床面積約1800平方メートルで、クリーンルームや試料室などを備える。

県の外郭団体「県産業・科学技術振興財団」（理事長＝小川洋知事）が運営し、新素材を活用したパネルなどの試作品を製作するほか、製品の耐久性や性能を評価するなど、民間企業との共同研究を進める。センター長に就任した安達教授は「2015年までに製品化につなげたい」と述べた。